

---

---

研究ノート

---

---

## ギルクリストのヒンドウスターニー語研究への貢献

—オリエント学校設立の経緯と出版活動—

倉 橋 愛\*

### John Gilchrist's Contributions to the Study of the Hindustani Language: History of Establishment of the Oriental Seminary and His Publications

KURAHASHI Ai\*

John Borthwick Gilchrist (1759–1841) contributed significantly to the Hindustani language education of civil servants of the East India Company. Despite many difficulties, he wrote many dictionaries and grammar books. Because of his linguistic achievements, he was appointed as a teacher at the Oriental Seminary since its inception to teach a course on Hindustani and Persian languages for civil servants. Gilchrist flourished at the Oriental Seminary, and this success led to the establishment of Fort William College (FWC). At FWC, established in Calcutta in 1800, he worked as a professor of the Hindustani language from 1800 to 1804. He supervised translation work by Indian scholars and published many books on Hindustani.

This paper concerns his personal history, research, and educational activities pertaining to the Hindustani language. His successors in the Hindustani department were unable to publish their work, and almost no reprinting was undertaken at FWC after his retirement. Although English replaced Indian languages as the administrative language of British India after a long controversy in the mid-nineteenth century, it is noteworthy that Gilchrist cooperated with the Governor-General in promoting 'oriental' education for junior civil servants. FWC could not have been established and maintained without Gilchrist's efforts.

#### 1. はじめに

英領インドにおける教育の方針を巡っては、現地のインド人を教育する際に使用する言語を、インド土着の言語にすべきか英語にすべきかについて、インド社会への非干渉の立場をとり、インド現地語を使用しようとするオリエンタリスト (Orientalist) と、英語の絶対的な優越を主張するアングリシスト (Anglicist) の間で、19世紀に盛んに論争が繰り広げられた。こ

---

\* 大阪大学, Osaka University

2017年11月13日受付, 2018年7月9日受理

の論争において大きな影響力を与えたのが、インド総督参事会のメンバーであったマコーリー (Thomas Babington Macaulay, 1800–1859) であった。

彼が示した「覚書」を受けて、1835年にベンティンク総督 (William Henry Cavendish-Bentinck, 1774–1839) の命令により、英語能力とイギリス人と同じ価値観をもつ「色の黒いイギリス人」を階層として生み出し、彼らを通してインドを文明化し行政の支配を確立させることが目指されるに至る [藤井 2016: 18]。このことにより、論争はアングリシストの勝利へ向かっていった。

本稿で取り上げるフォート・ウイリアム・カレッジ (Fort William College, 以下 FWC とする) は、アングリシストの主張が優勢となるよりも半世紀近く以前の 1800 年に設立された組織である。同組織は、インドのベンガル総督ウェルズリー (Richard Colley Wellesley, 1760–1842) が、イギリス東インド会社の新人文官にあたるインド派遣書記 (のちのインド高等文官) を対象にして、当時英領インドの首都であったカルカッタに設立した官吏養成機関である。

このカレッジの目的は、インドの現地言語科目を中心とした教育を通して、当時急速に拡大していたイギリスのインド統治業務の円滑化を図ることにあった。教育の対象は、インド人ではなくイギリス人の官吏であったが、インド統治で用いられるべき言語は英語ではなくインドの現地言語である、という前提の下で運営されていたことから、FWC はオリエンタリストの思想を体現した組織であったといえる。

FWC は、1800 年から 1858 年まで存続したが、1830 年代に講義が停止され、試験のみを実施する運営体制へと移行した [Vārṣṇeya 1947: 137]。その主な要因としては、ウェルズリー総督が、イギリス本国のイギリス東インド会社の取締役会に十分な報告をせずに FWC を設立したことにより、取締役会が FWC に対して縮小命令を発し続けたことが考えられる。

FWC の設立に関する先行研究は、国内外にいくつか存在する。英語による研究書について述べると、ダース (Sisir Kumar Das) は、FWC の設立から廃校までの経緯について、実施された言語教育や出版活動の内容を中心に、かなり詳しく述べている。具体的には、インド現地言語の当時の言語状況と関連させながら、FWC のインド現地言語科目教育について言及している。また、FWC においてイギリス人教員の監督下で著作・翻訳を行なったインド人ムンシーの活動、主に著作名や出版年について、まとまった記述を行なっている。<sup>1)</sup> しかし、設立以前の状況について、とりわけ FWC の先駆的役割を果たしたオリエンタル学校 (Oriental Seminary) については、ほとんど触れていない。教職員や学生に関する情報についても、簡潔な言及にとどまっている。

一方、ランキング (G.S.A. Ranking) は、オリエンタル学校開校時から FWC 廃校時までの

---

1) なお、FWC の言語科目やインド人ムンシーの活動に関しては、筆者の博士論文において、ダースの記述を中心に説明しているので参照されたい [倉橋 2017]。

主な出来事について詳述している。オリエンタル学校の成績優秀者名の一覧表や、FWC に在籍した学生の経歴と卒業後の進路に関する一覧表も示している。しかし、同書においても、代表的教員の経歴や著作物に関する情報に不足がみられる [Ranking 1911, 1920, 1921, 1922]。

ヒンディー語による研究書は、ヒンディー語散文成立との関連から著されたものは多く存在するが、FWC そのものについて取り上げたものとしては、ヴァルシュネーヤ (Lakshmiśāgar Vārṣṇeya) の *Fort William College: 1800–1854* [Vārṣṇeya 1947] がほぼ唯一のものである。この研究書では、FWC に関する歴史的出来事が、詳細な年月日と共に記されており、他の先行研究ではあまり触れられていない FWC の後半の時期についても取り上げられている。但し、どちらかといえば外形的な出来事に焦点を当てているためか、学内で実施された試験の内容やその表彰対象者等といった学生についての情報は、不足している。

ウルドゥー語による研究書については、ペーガム (Obaida Begum), キドウィ (Sadiq-ur-rahman Kidwai), シャミーウッラー (Samī‘ullāh) によるものが存在する。これらにおいては、FWC 校史が簡潔に述べられているが、FWC の教員の活動に多くのページが割かれている反面、FWC の組織と教育の全体像に迫る記述は不十分であるといわざるをえない。

日本語による研究書としては、浜渦哲雄の『イギリス東インド会社』[浜渦 2009] といった、イギリス東インド会社史に関する研究書が挙げられるが、いずれも FWC に関しては簡潔な説明にとどまっている。いずれも、FWC の開講科目や学期制、また会社取締役会からの FWC 存続への圧力等について言及されているが、特に開講科目と学期制の記述において、文献間で記述に相違も見受けられる。研究論文としては、黄 [2016] が挙げられる。同論文は、中国語を FWC の言語科目として開講しようという動きがあったことについて言及している。

総じて、これまでの先行研究は、FWC に関連する出来事について言及することに重点を置いているものが多い。しかも、設立後約 5 年の間に、会社取締役会からの反対を受けて FWC がその社会的意義を失ったものとみなし、その後の活動を無視するような記述を行なっているものがほとんどである。さきに触れた教育言語を巡るアングリシストとオリエンタリストにおける論争との関連から FWC について言及している研究書に至っては、筆者が知る限りほとんど存在しない。

この FWC において、1800 年から 1804 年までの期間にヒンドゥスターニー語<sup>2)</sup> の教授を務めたのが、ギルクリスト (John Borthwick Gilchrist, 1759–1841) である。彼は、オリエンタル学校の頃からインド派遣書記へのインド現地語教育に従事した人物であり、FWC 在職中には、インド人学者との協力の下で、ヒンドゥスターニー語の語学書や文学作品の翻訳本を刊行する活動を行なった。

本稿では、FWC の代表的教員のひとりであったギルクリストの経歴と著作活動について、また彼が行なったヒンドゥスターニー語の研究・教育活動について述べ、彼の活動が英領イン

ドにおける官吏への現地言語教育の端緒を開いたのだということを明らかにする。FWCの代表的教員に関する先行研究の不足を、本稿を通して補えるよう努めたい。また、彼は、インド政府官吏への教育言語を巡る論争が繰り広げられる中で、ウェルズリー総督のオリエンタリズム的教育思想に共鳴した、数少ない人物のひとりであったと考えられる。本稿を通して、オリエンタリストとして周知されている彼が行なった活動を再評価することを試みる。彼の経歴や功績に焦点を当て、インドの言語教育、官吏教育、出版等の歴史研究において参照されうる資料を提示するという点が、本稿のひとつの意義である。<sup>3)</sup>

## 2. オリエンタル学校での活動

まず、ギルクリストとオリエンタル学校との関わりについて述べる。具体的には、オリエンタル学校設置の経緯と教育課程の概要、オリエンタル学校でのギルクリストの教育活動と成果についてである。

多言語社会インドをイギリスが効率的に統治するには、現地の民衆に英語を学ばせるよりも、イギリス人官吏に現地の言語を習得させる方が、より迅速な対応が可能であった。こうした状況から、18世紀末から19世紀前半の時期に、イギリス人官吏にインド現地語を中心とした教育を行なうという、オリエンタリズム的思想に基づいたインド文官教育組織が運営された。本稿で取り上げるギルクリストは、これらの組織でヒンドゥスターニー語の教鞭をとり、出版活動において多くの功績を残した人物である。

当時、ヒンドゥスターニー語やペルシア語の教育を受けるために、インド派遣書記が個人的にインド人教師を雇うことが多かった。しかし、当時のインド人学者は、英語の知識を全く持

- 
- 2) ギルクリストは、現代ウルドゥー語に相当する言語と、現代ヒンディー語に相当する言語の両方に対して、「ヒンドゥスターニー」という名称を使用していた。彼は、当時インドに広まっていた言語について、(1) 宮廷の、つまりペルシア語、(2) ヒンドゥスターニー語、(3) ヒンダヴィー語、の3つに分類し、「ヒンダヴィー語+アラビア語+ペルシア語=ヒンドゥスターニー語」という公式も示している [Vārṣṇeya 1947: 168-169]。しかし、ギルクリストの後任であるプライス (William Price) は、「ヒンドゥスターニー語」という言語名を現代ウルドゥー語に相当する言語のみに対して使用し、現代ヒンディー語に相当する言語には使用しなかった。「ヒンドゥスターニー語科」という語科名称も、同時期に「ヒンディー語科」又は「ヒンディー・ヒンドゥスターニー語科」に変更された [Vārṣṇeya 1971: 356-357]。このような変更がなされた理由としては、現代ウルドゥー語と現代ヒンディー語に相当する、文法的には同一の両言語間にみられた使用文字と語彙系統における相違が、ひとつの言語として扱うには大き過ぎるということが、インド現地言語の教育や研究が進む中で明らかになったためではないかと考えられる。FWCの外部、つまりインド統治に関わるイギリス東インド会社の社員や研究者の間でも、ヒンドゥスターニー語の定義について混乱がみられた。ヒンドゥスターニー語は、インドの民衆が日常的に用いている言語であると明らかになって以降、インド全土の「共通語」であるとみなされるようになった。しかし、この言語が本当にインド中で通用するのか、それとも北インド限定で使用されている言語なのか、あるいは港湾や市場等のみで使用されているのかについて、18世紀を通して考究がなされた。「ヒンドゥスターニー語」という言語名がヨーロッパ人によって考案されたものであると公表されたのは、19世紀後半になってからのことであった [藤井 2003: 66-68]。
- 3) なお、本稿では、さきに挙げたような先行研究を用いるほか、イギリスの大英図書館所蔵の公文書を、一次資料として使用する。

ち合わせていなかった。ギルクリストは、インド人学者は英語を理解できず、インド派遣書記もインド諸語を知らないが、イギリス人文官にインド諸語を教えれば彼らはインド人学者と話をすることが可能となり、当時のイギリス東インド会社における行政言語で、官吏が習得する必要があるとされていたペルシア語の習得が容易になると考えた [Samī'ullāh 1989: 11]。彼は、若手インド派遣書記がインド人学者からペルシア語を学び始める前に、ヒンドゥスターニー語と、初級のペルシア語文法を教えてはどうかとウェルズリー総督に提案した [Vārṣṇeya 1947: 6]。

ウェルズリー総督は、自身の官吏養成計画にギルクリストが協力してくれるよう希望した [Vārṣṇeya 1947: 6]。こうした経緯から、ギルクリストは、FWC の設立を目指して前段階的な試みとして設置されたオリエンタル学校の教育コースに教師として派遣されることとなった。つまり、ギルクリストは、FWC の構想段階から、大きな影響力を及ぼした人物であった。

ギルクリストは、オリエンタル学校で教鞭をとるにあたり、多くの報酬や経費を求めなかった。1798 年 12 月 15 日付でベンガル政府から宛てられた公文書<sup>4)</sup>によると、ギルクリストはヒンドゥスターニー語とペルシア語を教える際の報酬について、それまでインド人学者を雇うのに支払われていた金額以上のものは望まないと述べている<sup>5)</sup> [IOR/H/488: 1]。ウェルズリーは、官吏にインド人学者を雇うための費用を支給する制度を廃止し、その代わりに、1 年間ギルクリストに費用を支給する制度を作った [Vārṣṇeya 1947: 6]。

1798 年 12 月 24 日付で政府事務官からギルクリストへ雇用する旨の手紙が送られ [Samī'ullāh 1989: 12]、翌 25 日付でギルクリストは雇用された [Begum 1983: 30]。同日には、ライターズ・ビルディングズの一室が与えられた [Samī'ullāh 1989: 13]。

開校時、オリエンタル学校の学生数は 31 人であった [Siddiqi 1979: 92]。この学校は、「マドラサ」、「ヒンディー・マドラサ」とも呼ばれた [Samī'ullāh 1989: 13]。学生の状況等について、ギルクリストは日誌を書き記した。日誌中では、日付と出来事が記されており、最初の 6 ヶ月間でヒンドゥスターニー語のみの教育が行なわれ、次の 6 ヶ月間でペルシア語教育、1800 年 1 月 1 日からはベンガル語教育を行なう予定である、といった計画も記されている。

また、この学校では、ギルクリストの著書『東洋言語学者』(*Oriental Linguist*) が教科書として使用された。ギルクリストは、学生を 4 つのクラスに分けている。1 番上のクラスの授業は 3 月 18 日から朝 9 時に実施し、1 時間余裕をもって指導できるよう、9 時 10 分前に入室するようにとも指示している。2 番目のクラスの授業は、10 時から 11 時 10 分まで実施した。この授業には、1 番上のクラスの学生も参加することができたが、その反対に 2 番目のクラス

4) 内容から、取締役会に宛てたものと思われる。

5) 但し、ギルクリストの監督者であったフランシス・グラッドウィン (Francis Gladwin) は、オリエンタル学校の財政支援を政府に求めている。政府は教科書を、200 部学校用に購入した [Vārṣṇeya 1947: 6]。

の学生も、希望すれば1番上のクラスで学ぶことが許されている。3番目のクラスの授業は1時、4番目のクラスの授業は4時から開始した [Siddiqi 1979: 92-105]。

ギルクリストは、ヒンドゥスターニー語とペルシア語を教え、1年後には習熟度を測る試験が実施された。1800年1月9日にウェルズリーは、オリエンタル学校の学生を試験する命令を下した。試験の日程は、同年6月1日に定められている。この任務のために、5月27日に委員会<sup>6)</sup>も設置された。7月21日から25日にかけて会合が開かれ、委員会はギルクリストの努力や熱意と学生の言語習得を称えている。7月29日にギルクリストは総督へと報告書を送っており、総督はその報告書を出版するよう命令した [Vārṣṇeya 1947: 6-10]。

1800年8月21日付のカル Катタ・ガゼット誌増刊には、「1799年2月から開講されたギルクリストのヒンドゥスターニー語とペルシア語の指導に出席した若手文官を試験したところ、能力の向上が見受けられた」という内容の報告書が1800年8月17日に提出されたことが記された。この報告書によると、ヒンドゥスターニー語の学生はクラス分けされ、それぞれのクラスごとに試験が用意されることになったという。ペルシア語に関しては、クラス分けは行なわれなかった。試験の優秀者は表1のとおりである。

表1からは、ウェアリング (Edward Scott Waring)、ロイド (Charles Lloyd)、マッケンジー (Lewis Mackenzie) という人物が、ヒンドゥスターニー語とペルシア語の両方の試験で上位を占めていたことが確認できる。同報告書では、「学生数人の能力がかなり向上した」と述べられており、学生によって習熟度に差がみられるものの、全体としてはオリエンタル学校の計画が成功したことが示唆されている。賞の受賞者とそれ以外の一部の学生には、インド人学者を雇うための手当が支給された。これらの賞や手当は、1800年7月29日に授与された [IOR/H/487: 167-171]。

また、同表からは、ヒンドゥスターニー語の1位クラスの優秀者が、ペルシア語においても優秀者として表彰されていることが読み取れる。学生がヒンドゥスターニー語とペルシア語の授業を受講し最後に試験を受けたことについてはさきにも触れたが、賞金やメダルが学生に授与されていたものの、このオリエンタル学校は、FWCを設立する意義を示すという目的で作られた組織であったということもあり、試験の成績が受講生の官吏としてのその後のキャリアにどこまで関わっていたのかについては定かではない。但し、表1の人物と同一人物であるかは特定し難いが、1801年5月1日にC. Lloydという学生がFWCに入学し、アラビア語、ペルシア語、ヒンドゥスターニー語、ベンガル語を履修し、8ヵ月で卒業していることは確認できる [Das 1978: 129]。

6) 1800年9月2日付のベンガル政府からの公文書によると、試験委員会のメンバーには5人の会社関係者が任命された。そのメンバーは、カークパトリック (William Kirkpatrick)、エドモンスターン (N. B. Edmonstone)、ブラキエール (W. C. Blaquiere)、ハリントン (J. H. Harrington)、バーロウ (G. H. Barlow) であった [IOR/H/487: 177]。スィッディーキー [Siddiqi 1979: 107] やランキング [Ranking 1911: 6] も、同じ5人の名前を委員会のメンバーとして挙げている。

表 1 オリエンタル学校試験の優秀者名と表彰内容

試験言語名	クラス	順位	優秀者名	表彰内容
ヒンドウスターニー語	1 位クラス	1 位	Edward Scott Waring	金メダル・1,600 ルピー
		2 位	Charles Lloyd	金メダル・1,500 ルピー
		3 位	Lewis Mackenzie	メダル・1,300 ルピー
	2 位クラス	1 位	William Henry Trant	金メダル・1,400 ルピー
		2 位	Thomas Fortescue	1,200 ルピー
		3 位	Gordon Forbes	1,000 ルピー
	3 位クラス	1 位	John Monckton	1,100 ルピー
		2 位	William Butterworth Bayley	900 ルピー
		3 位	James Hunter	700 ルピー
	4 位クラス	1 位	William Morton	800 ルピー
		2 位	David Morrison	600 ルピー
		3 位	William Naym Martin	500 ルピー
ペルシア語		1 位	Edward Scott Waring	金メダル・1,600 ルピー
		2 位	Charles Lloyd	金メダル・1,500 ルピー
		3 位	Lewis Mackenzie	メダル・1,300 ルピー

出所：[IOR/H/487: 167-171]

### 3. 経 歴

既述のとおり、ギルクリストはオリエンタル学校での教育活動において重要な役割を果たし、成果を挙げた。本節では、前節で扱ったオリエンタル学校での活動との関連を確認しつつ、彼がその生涯において残したさまざまな功績を概観する。

ギルクリストは、1759年6月19日にエディンバラで生まれた。父ウォルター（Walter）、母ヘンリエッタ（Henrietta）、姉ヘレン（Helen）との4人家族であったが、彼が生まれたその年に父は家族を捨ててアメリカへ渡った。10歳位の時には、母が父を探しに北アメリカへと向かったが、父を見つけることが出来ずニューファンドランド（Newfoundland）に移住してしまった。母を追って大西洋を渡った姉も、後に現地で結婚してしまう [Jones 2007: 64-65]。

ギルクリストはこうした家庭環境にいたことから、10歳になると、エディンバラの孤児や父親のいない子どものための慈善組織ジョージ・ヘリオツツ病院（George Heriot's Hospital）で教育を受けることとなる。具体的な時期については不明であるが、インドへ来る以前には、西インド諸島で藍の栽培や藍製品作りの手法も習得していた [Jones 2007: 65-66]。

1780年代までに、彼は外科医としての訓練を終えないまま英国海軍（Royal Navy）の軍医補に雇われた。1782年2月には、ベンガル政府（Bengal establishment）の軍医補に任命されている [Jones 2007: 66-67]。その後、1783年4月3日にカルカッタに到着した [Vārṣṇeya

1947: 204].

インドに到着すると、インド人兵士の話す言葉を習得する必要があると感じ、ヒンドゥスターニー語を学び始めた。後世には、「会社のインド人兵士が使用するこの言語を話せなければ、外科医を続けていくことは不可能であると感じ、学ぼうと思った」と述べている [Jones 2007: 68].

当時イギリス東インド会社は、行政用の言語としてペルシア語を採用していた。しかし、ギルクリストは、デリーのムガル宮廷の衰退と共に、ムガル宮廷で使用されていたペルシア語に代わって、インドの民衆言語であったヒンドゥスターニー語の需要の高まりに気付いていた。会社の任務を上手く行なうためには、官吏がヒンドゥスターニー語を習得することが非常に重要であると考えていた [Vārṣṇeya 1947: 3]. 外科医を辞めた時期については不明だが、彼は、こうした経緯で、外科医を辞めヒンドゥスターニー語研究を行なうようになったと考えられる。

研究活動を続けヒンドゥスターニー語の語学書作りに熱心に取り組んだギルクリストであったが、天災や体調不良により、著作・出版活動を行なううえでしばしば困難に直面することとなる。

たとえば、1783年11月1日に、彼の所属する分遣隊がファルッカーバード (Farrukhabad)<sup>7)</sup>へと駐屯した際に、彼は、自分で使用するのを主たる目的として、ヒンドゥスターニー語の文法書や辞書を作り始めた。1785年1月2日には、インド監督局に対して1年間の休暇とその期間分の給与と手当を申請し1年間の休暇を許可された後には、ラクナウ (Lucknow)、ファイザーバード (Faizabad)、アラハバード (Allahabad)、ジャオンプル (Jaunpur)、ベナレス (Benares) 等を巡った [Kidwai 1972: 38–39].

その休暇中、ファイザーバードにいた際に洪水に遭い、そこから退去している。また、設定した出版物の価格があまりに安く、原稿の締め切り期限の設定も甘かった。遠くの地域からインド人を招くための費用もかさみ、出版活動は成り立たなくなった。1787年には、ベナレス近郊のガーズイープル (Ghazipur) で藍作りを行なうことを許されて、<sup>8)</sup> 1795年に健康を害してそこを去るまで藍作りを続けた [Jones 2007: 75–78]. この滞在期間に、砂糖の取引も行なっている [Siddiqi 1979: 53].

このように、ギルクリストは著作・出版活動を成り立たせるために、自らあらゆる方法で資

---

7) 現ウツタル・プラデーシュ州、ガンジス川西岸に位置する都市。但し、当時はまだウツタル・プラデーシュ州という名称は使用されていなかった。

8) ギルクリストは、枢密院から藍作りを行なう許可を得た。彼は、当時イギリス東インド会社の統治下に置かれていたベナレス藩王国から、藍作りに使用する土地を手に入れた [Siddiqi 1979: 53]. ギルクリストが枢密院からの許可を得なければならなかったのは、ベナレス藩王国がイギリスの統治下にあったことが関係していたと考えられる。



金作りに奔走した。以下の 1787 年 6 月 4 日付のコーンウォリス総督への手紙からは、彼のそうした努力が窺える。

「さきの 3 年間、私は辞書の編纂に尽力し、第 1 巻の稿本を作成し終えました。第 2 巻と第 3 巻の編纂を行なうようご命令ください。」

「研究の支援を受けるために、私は、ベナレスのザミンダール (zamindar) やアワドのスーパー<sup>9)</sup>の土地に行くようご命令頂けることを望みます。」

「この国では、印刷に多くの費用がかかるとの懸念から、利益は望めません。このため私は、藍栽培を行なう許可を頂きたいと思えます。西インド諸島に数年住んでいたため私はこれを熟知しており、自分の収入を藍栽培から捻出したいと強く希望します。」

[Vārṣṇeya 1947: 3-4]

総督は、彼にベナレスで藍栽培を行なう許可を与えた。アワド (Awadh) で藍栽培を行なう許可を得られなかったギルクリストは、ベナレスへ行き、藍栽培だけでなくアヘンに関わる仕事にも従事した。

1791 年 1 月 6 日付で、ガーズイープルからインド監督局に印刷の不便を謝罪する手紙を送っていることから、少なくとも 1791 年にはガーズイープルにいたと判明している。その後、ガーズイープルを去ったのは、体調不良になったことに加えて、借金が増えた、あるいは藍栽培やアヘンの仕事での利益が出なくなったためではないかと考えられる [Vārṣṇeya 1947: 3-5]。

ギルクリストは、当初、1797 年 1 月までに帰国しようと決意を固めていたが、『東洋言語学者』出版への支援を政府に求め、出国の日を 1799 年 1 月まで引き延ばすこととなる [Kidwai 1972: 45]。その後、ウェルズリー総督からオリエンタル学校、次いで FWC に招かれたことにより、1799 年 1 月以降もインドにとどまることになった。オリエンタリズムの思想の下で開校されたこれらの組織において、教育や出版活動などで多くの業績を残した。

1798 年 12 月 24 日付でベンガル政府次官がギルクリストに宛てた手紙には、オリエンタル学校のヒンドゥスターニー語とペルシア語の教員に、ギルクリストが任命されると決定した旨が記されている。また、同日付でベンガル政府長官は、ギルクリストへ任命書を送っている。ギルクリストは、その翌日に任命を受諾した。

オリエンタル学校が開校すると、彼は熱心に報告業務を行なった。1799 年 1 月 29 日付の手紙と共に 31 人の官吏を学生とする通知を受け取ると、その日からオリエンタル学校が廃校

---

9) スーパーダール (subedar) のこと。(1) 州知事；州長官，(2) (ムガル朝時代の) 州長官，(3) 英印軍の (特務) 中尉，といった意味をもつ語である [古賀・高橋 2006: 1373]。

となるまで、彼は報告書を書き続けた [Vārṣṇeya 1947: 7-8]. 1799年2月には、オリエンタル学校の教壇に立ち始めた [Kidwai 1972: 46].<sup>10)</sup>

その後、1800年8月18日付でFWCに雇用され [Begum 1983: 58], 1800年11月1日には、FWCのヒンドゥスターニー語科長兼教授に任命された [Vedāṅkārā 1969: 41]. ヒンドゥスターニー語の講義は、週2回のペースで行なわれた [Vārṣṇeya 1947: 19].<sup>11)</sup>

オリエンタリストとしてインド派遣書記への言語教育に尽力したギルクリストは、それ以外にもインド人ムンシーを監督し数多くの著作・翻訳活動に従事したり、自ら考案していたヒンドゥスターニー語正書法の考究を重ねたりといった活動を、FWC在職中に行なった。

しかし、1804年2月23日には、健康上の理由を述べ、FWCを辞職することとなる。彼は、それ以前にも2度帰国を決意していたものの、1度目の時には、オリエンタル学校の監督者 (superintendent) への任命を受けざるをえなかったため、帰国することが出来なかった。2度目は1803年で、FWC評議員会長官<sup>12)</sup>に、ヨーロッパへ戻りたいと考えていることをFWC評議員会に伝えてくれるよう頼んでいる。<sup>13)</sup>しかし、この時には、ウェルズリーが説得したことと思いとどまった [Kidwai 1972: 54-55].

彼の辞職願の一部内容を、以下に引用する。

「突然の重い病気によって、やむを得ず船でヨーロッパへ戻るために、総督から許可を得なければなりません。私は、その許可を得ました。今私は、総督の好意により任じられていたヒンドゥスターニー語科の教授という責任ある職を辞任するつもりです。カルカット号の船の乗車券も購入済です。私の辞表を受理してください。」 [Samīullāh 1989: 52-53]

1804年2月23日付で評議員会長官に宛てて送付したこの辞職願は、3日後の26日の評議員会で議題に取り上げられた。辞職願の中でギルクリストは、体調不良のほか、出版にかかる資金の不足も辞職の理由として述べている。また、同辞職願には、FWCの教科書の売上に関する

---

10) スイッディーキーによれば、オリエンタル学校が開講されていたのは1799年1月から1800年7月までとされている [Siddiqi 1979: 32]. ベーガムによると、同学校が設立されたのが1799年1月で、実際に講義が開始されたのは翌2月のことであった [Begum 1983: 30].

11) FWCの公文書 [PP. 1813: 20], また浜渦 [浜渦 2009: 140], 浅田 [浅田 1998: 105], スイッディーキー [Siddiqi 1979: 114-115], ヴァルシュネーヤ [Vārṣṇeya 1947: 14, 1971: 330-331] の記述からFWCで開講されたと判明している科目は、アラビア語、ペルシア語、サンスクリット語、ヒンドゥスターニー語、ベンガル語、テルグ語、マラーティー語、タミル語、カンナダ語、ヨーロッパ近代語、ギリシア語、ラテン語、ヒンドゥー法、インド統治におけるイギリス政府の法令・法規、自然科学である。オリエンタル学校と比べると、FWCの科目の数や分野はかなり多岐に渡っていた。

12) FWCの内部規則の制定や組織の検証を行なう組織。FWCの教員らで構成されていた。

13) 1803年4月11日にFWCの評議員会長官へ手紙を書き、ヨーロッパへ帰国したいと申し出ている。この手紙は同年5月2日の会合で取り上げられたが、承認されなかった [Samīullāh 1989: 52].

会計、印刷機や印刷所の管理の引き継ぎを行なった旨も記されている [Vārṣṇeya 1947: 62–63].

キドウィはギルクリストが 1804 年に辞職した原因を、同年 9 月 20 日に行なわれた第 3 回公開演習討議の論題が、「ヒンドゥスタンの人々が宗教本によってキリスト教の教義との比較を行なえば、彼らはキリスト教を受け入れるであろう」から「サンスクリット語はインドの言語の源である」へと総督の指示で変更されたことに怒ったためであるとも説明している [Kidwai 1972: 56]. 演習討議の議題を変更するようにとの干渉を受けたために、辞職してイギリスへ帰国したと考えられる [Samʿullāh 1989: 54–55].

イギリスに帰国してから数年間は、ヒンドゥスターニー語の講義を無給で行ない、新しい作品の編集や過去の作品の改訂に尽力し、また事業を起こしたり政治に関わったりと、さまざまな活動を行なった。帰国直後の 1804 年 10 月 30 日には、エディンバラ大学から法学博士の名誉学位を授与されている [Kidwai 1972: 57].

その後、1806 年 2 月 12 日から 5 月 19 日までの間、イギリス東インド会社が FWC に替わる組織としてロンドン郊外に設立したヘイリーベリー・カレッジ (Haileybury College) で、開校前から臨時の教授を務めた。彼は、ヒンドゥスターニー語だけでなく、ヒンディー語、ペルシア語を教えた [Vedānkārā 1969: 35–36]. 1806 年には、『大英帝国インドの監督者』 (*British Indian Monitor*)<sup>14)</sup> 第 1 巻を、1808 年には第 2 巻を出版している [Jones 2007: 83].

しかし、彼はヘイリーベリー・カレッジを 2, 3 ヶ月で退職してしまう。1806 年にはエディンバラに引っ越し、友人ジェームズ・イングリス (James Inglis) と共に銀行の経営に着手した。1808 年には、メアリー・アン・コヴェントリー (Mary Ann Coventry) と結婚している [Jones 2007: 84]. 1809 年 1 月 6 日に、イギリス東インド会社を辞職し、29 年間の職務に終止符を打った [Kidwai 1972: 57].

その後、彼は、政治に参画することとなる。下院議員ジョセフ・ヒューム (Joseph Hume) と親交があり、1815 年には政治に関する著作『憲法に関する議会の改革』 (*Parliamentary Reform on Constitutional Principles*) を出版した [Jones 2007: 84]. また、イングリスと共にイギリスに会社も設立している。銀行を設立した動機は、自身の研究活動の資金を調達するためでもあったが、こうした事業は失敗に終わっている [Kidwai 1972: 57–58].

1816 年にはロンドンへ移り、イギリス東インド会社の社員のために自宅に学校を設立し、再び教鞭をとった。1818 年にこの学校は、レスター広場へと移転され、イギリス東インド会社からの支援を受けている。1826 年に彼は、『東洋・西洋教育の先駆者』 (*The Oriental-Occidental Tuitionary Pioneer*) というタイトルで、言語学についての著書を出版している

---

14) 正式な書名は、*The British Indian Monitor: Or the Antijargonist, Stranger's Guide, Oriental Linguist, and Various Other Works*. 『東洋言語学者』、『通語反対論者』 (*The Anti-Jargonist*)、『初心者入門書』 (*Stranger's Guide*) の内容を整理しひとつにまとめた著書である。

[Jones 2007: 85].

ギルクリストは1826年まで学校経営を続けたが、その後アルノット (Sanford Arnot) とフォーブズ (Duncan Forbes) という人物に学校を譲渡した。授業で学生に自分の本を買うことを強制したことに加え、彼の教育方針が批判されたことが原因であった [Jones 2007: 85–87]。それにもかかわらず、1828年には、その学校の近くに新たな学校を設立し、さきの2人からの反感を買うこととなった。その後、1841年1月9日にパリで没している [Kidwai 1972: 58]。病気の治療のためにフランス旅行に来ていた時のことであった [Muhammad 1977: 25]。

#### 4. 著 作 活 動

このように、ギルクリストは生涯に渡り、ヒンドゥスターニー語研究に携わった。本節では、前節で言及した彼の活動の中で主たるもののひとつであった、著作活動について詳しく取り上げる。以下に挙げる文献内容からは、当時、ヒンドゥスターニー語の語学書や文法書が広く知られていなかった中で、彼が財政面等で苦勞を重ねながらも著作活動を積極的に行なっていたことがわかる。

ギルクリストは、『英語・ヒンドゥスターニー語辞書』(*A Dictionary, English and Hindoostanee*)<sup>15)</sup>の第1巻を1786年、第2巻を1790年に出版している。第2版は1810年にエディンバラで、『ヒンドゥスターニー言語学』(*Hindustanee Philology*)という異なるタイトルで出版された。また1796年には、『ヒンドゥスターニー語文法書』(*A Grammar of Hindoostanee Language*)<sup>16)</sup>が出版された。

同年に彼はカルカッタへと戻っており、この『ヒンドゥスターニー語文法書』はカルカッタで出版された [Das 1978: 13–14]。これらの辞書や文法書の出版費用は、予約購買費から捻出されるものとされた [Jones 2007: 74]。しかし、ヒンドゥスターニー語の辞書と文法書の出版で多額の借金を負い、1791年には、イギリス東インド会社に借金返済の支援を求めている<sup>17)</sup> [Kidwai 1972: 43]。

その後、1798年には『補遺』(*Appendix*)と『東洋言語学者』を出版した。これら2作品は、初学者向けの教科書であった [Kidwai 1972: 45]。

『補遺』は3巻から成り、第1巻と第2巻は辞書と補遺、第3巻は文法書で構成されていた。

15) 1787年6月4日付で、ギルクリストはカルカッタからコーンウォリスに宛てて、『英語・ヒンドゥスターニー語辞書』第1巻の稿本が完成したとの報告と共に、続編の出版指示を仰ぐ手紙を送った。1790年11月23日にこの辞書が完成したという通知を、同年12月27日には印刷した辞書を取締役会へ送っている。辞書の価格は途中で分量が増したため、40ルピーから50ルピーへ値上げされた [Vārṣṇeya 1947: 3–5]。辞書印刷の通知がイギリス東インド会社に届いたのは、1791年1月6日のことであった [Siddiqi 1979: 60]。

16) この著作も、当初の50ルピーから60ルピーへと値上げされた [Vārṣṇeya 1947: 5]。

17) イギリス東インド会社が彼の要求に応じたのかについては不明である。

『東洋言語学者』は以下のような章立てであった。第 1 章と第 2 章は、『文法書』と『英語・ヒンドゥスターニー語辞書』。第 3 章は、『ヒンドゥスターニー語・英語辞書』。第 4 章は、ヒンドゥスターニー語の物語集で、3つの物語を収録しており、それらのうち 1 作は英語の物語を翻訳したもの、あとの 2 作はインドの物語であった。インドの物語には、英訳も付された。第 5 章は『軍律 (*Articles of War*)』で、英訳付であった。第 6 章は『ヒンドゥスターニー語詩集 (*Hindoostanee Odes*)』で、ヒンドゥスターニー語やペルシア語のガザル詩に、英訳が付された [Siddiqi 1979: 78-84].

ギルクリストの要求を受けて、政府<sup>18)</sup>は『東洋言語学者』を 300 部購入した。1798 年 9 月 17 日の手紙の中でギルクリストは政府への感謝を述べ、『補遺』を 300 部送り、その代金を受け取っている。また、政府に対して『東洋言語学者』の代金も請求し、政府はこれに応じた。同年 11 月 12 日には、政府に『東洋言語学者』を数部送っている [Vārṣṇeya 1947: 5-6].

さらに、同年には、ギルクリストが制作した辞書、文法書と、『東洋言語学者』が、『ヒンドゥスターニー語言語学』(*Hindoostanee Philology*)として販売された [Jones 2007: 77]. このうち、『東洋言語学者』はヒンドゥスタンの言語の入門書で、ダイアログや物語、詩の例文が付された。1798 年の初版はカルカッタで印刷され、前総督兼アジア協会代表者ジョン・ショア (John Shore) への謝辞や、ヒンドゥスターニー語の文法と発音表記について記している。この『東洋言語学者』は、1800 年に改訂され、『通語反対論者』として再版された。この版は『東洋言語学者』よりも安い価格で販売された [Jones 2007: 83].

ヒンドゥスターニー語の語学書作りに取り組み始めた当初、彼は、インフォーマントらから、ヒンドゥスターニー語で入手可能な辞書や文法書は全くないと聞いていた。それゆえ、自身をヒンドゥスターニー語研究における先駆者と位置付け、入手した本の内容を評価することを怠ったため、インフォーマントらからアミール・フスローの韻文語彙集『ハーリク・バーリー』(*Khāliq Bārī*)を受け取っても、その価値を見出すことができなかった [Jones 2007: 75].

しかし、実際には、最初のヒンドゥスターニー語の語彙集は、1704 年にフランシスカス (Franciscus M. Turonensis) によって既にスーラトで編纂されていた。最初のヒンドゥスターニー語文法書も、1715 年にケテラー (John Joshua Ketelaer) によって編纂されていた [Kidwai 1972: 87]. 1740 年代には、ハーン・エ・アールズ (Khān-e-Ārzū) が、約 5,000 語収録の『ナワーディル・ウル・アルファーズ』(*Nawādir-ul-Āfāz*)を編纂していた [Jones 2007: 75]. また、1765 年には、ハドレイ (Hadley) がヒンドゥスターニー語の文法書を出版し、1809 年に第 7 版が刊行されるまで改訂が重ねられていた。1773 年にはファーガソン (J. Furguson)

18) ヴェルシュネーヤは、ここでの「政府」がどこの政府であるか明記していない。しかし、ヒンドゥスターニー語の語学書を購入していることから、官吏へのヒンドゥスターニー語教育の需要が高く、FWC の立地する管区の政府であった、ベンガル政府のことを指しているのではないかと考えられる。

がロンドンで辞書を、1791年にはハリス（Henry Harris）が文法書を出版している [Siddiqi 1979: 14-19].

1798年出版の文法書の序章で、ギルクリストは、ハドレイや他の研究者の著作について言及している [Jones 2007: 81]. 出版年が1798年とことから『東洋言語学者』のことを指していると考えられる同書には、ハドレイの著作を「取るに足りないもの」(insignificant catch-penny production) であると述べている [Gilchrist 1798: i]. 従って、ギルクリストは、他の研究者によるヒンドゥスターニー語の語学書の存在には比較的早い時期に気付いていたようであるが、それらの内容については批判的な見解を示していたと考えられる。

その後も、ギルクリストは著作活動を続けた。FWC在職時に著した、あるいは監修を行なったとされる著作の一覧を、後述の資料1で挙げているので参照されたい。<sup>19)</sup>

資料1によると、ギルクリストがFWCにおいて著した、もしくは監修を手掛けたとされる作品のうち、その約6割を語学書が占めている。ギルクリストは物語文学作品も多く手掛けているが、そうした物語文学も、FWCの学生やインド諸語初学者向けの読み物として著されたものが多い。

ヴァルシュネーヤによると、ギルクリストは、ヒンドゥスターニー語文献印刷のために、またそうした印刷の恩恵をFWCの学生が受けられるように、FWC評議員会と以下のようなやり取りを行なっていた。こうしたやり取りからは、ギルクリストがヒンドゥスターニー語科の代表者として、ヒンドゥスターニー語の作品を出版するのに苦労があったことが窺える。その苦労の一例を、些か煩瑣ではあるが、細部に渡って紹介したい。<sup>20)</sup> 以下、ヴァルシュネーヤの記述の要約を示す。

FWC評議員会は、1801年11月に、さまざまな本の内容を抜粋した著作『マルシヤー』の出版を決定したが、事前に評議員会からの出版許可を受けなければ、出版することは出来ないとした。ギルクリストは、1802年1月12日付の評議員会への手紙の中で、学生の練習本を印刷する際の予算、有用なヒンドゥスターニー語の文献が他に無いこと、評議員会から印刷への支援を受けたいと希望していること、FWCのために印刷が翌年まで続けられる予定であること等を述べ、印刷された本の説明と代金の明細書も同封している。

19) この資料は、ダース [Das 1978], ジョーンズ [Jones 2007], ケーシャヴァン [Kesavan 1997], プリケット [Pritchett 1991], ローバック [Roebuck 1819], スィッディーキー [Siddiqi 1979], ヴァルシュネーヤ [Vārṣṇeya 1947], 山根 [山根 1990] による各文献から作成した刊行物一覧に、それらの刊行物を入手し得られた情報を補足したものである。なお、資料中で挙げられている刊行物のほとんどは Google Books 上で公開されている。公開されていない刊行物についても、Worldcat 等のサイトで書誌情報が確認可能である。

20) なお、FWCの運営費は、インドにいる文官全員の給与から天引きした資金と、政府出版所の余剰利益 (additional profits) によって賄うと規定されていた [Das 1978: 9]。ゆえに、以下で述べるように印刷費用捻出のために多くの働きかけを行なったギルクリストであったが、FWCの運営経費を負担し、FWCの運営に関わっていたとは考えにくい。

この手紙を受け、同著作の印刷費用をギルクリストが一部負担することで、印刷許可が下りた。評議員会は、1801年6月30日の時点で、FWCが今後学生用の本の印刷にかかる費用を負担しないことを決定し、ギルクリストに出費の記録と印刷された文献の明細書を求めている。1802年1月12日付で、ギルクリストはこの要求に応じたものの、ヒンドウスターニー語の文献が非常に少ないため、さまざまな文献の出版を求めることを責務と考えることとなる。

彼は任務を全うするべく、以下のような条件を評議員会に書いて送った。

- (1) ギルクリストを支援するために、政府<sup>21)</sup>は学生用に出版されたギルクリストの本を、市場価格で購入する。
- (2) ギルクリストは、印刷する予定の本を、事前に印刷を認めてもらうために評議員会へ提出する。
- (3) こうした本は、さまざまなカレッジに無料で配布され、残りはFWCに保管される。
- (4) 保管されている本の中から必要な本の代金を政府に渡すと、直ちにそのことをギルクリストに伝える。
- (5) ヒンドウスターニー語科で必要になった文献は、各学生が市場価格で購入する。
- (6) 自分の学生たちのために、ギルクリストは著者としてこれらの本を自由に売る権利を得る。
- (7) FWCのインド人学者、ミール・シェール・アリー (Mir Sher Ali) がギルクリストの下でヒンドウスターニー文学の改訂を行なう現在の職に任命されている間は、著作、翻訳、複写の費用全てをギルクリストが政府に支払う。ミール・シェール・アリーが辞職又は死亡した場合には、他の人物が、現行の給与で任用される。
- (8) 学生の中に希望者がいれば、1年生には月50ルピー、2年生には月30ルピー、3年生には月20ルピーを超えない額で、本を販売する。
- (9) ギルクリストの出版活動を監督する全権限は評議員会にあり、学生がFWCを去る前に、評議員会が学生からギルクリストへの未払金を徴収する。
- (10) 現在印刷途中にある多くの文献には、補償金も付けられる。

ギルクリストは、学生たちにヒンドウスターニー語の知識を定着させ、演習を行なうために、ヒンドウスターニー語文献集を出版することにした。1802年1月27日付の手紙では、評議員会に対し、経費の支援を要求している。これに対して、評議員会は、同年2月1日付

---

21) ここでの「政府」も、官吏へのヒンドウスターニー語教育を必要としていた、ベンガル政府のことを指していると考えられる。

の手紙で回答した。

評議員会は、ヒンドゥスターニー語科の教科書を印刷するのに、10,000 ルピー以上の費用をかけたくはないと考えていた。しかし、ギルクリスト著の『ヒンドゥスターニー語の原則』(*Hindoostanee Principles*)と演習本が有用であると考え、5,000 ルピー以内の費用で増刷するよう命令した。

また、『庭園』(*Gulistān*)と『パンドナーマー』(*Pandnāmā*)を100部購入している。また、さらに、1802年2月1日に費用として認められていた5,000ルピーの中から1,000ルピーを『東洋寓話作者』(*Oriental Fabulist*)と『ヒンディー道徳教訓書』(*Hindee Moral Preceptor*)に対して支払うことを決定した。

それでも、ギルクリストは十分な経費を評議員会に負担してもらうことはできなかった。1802年6月9日には、手紙と共に自身の著作『一覧表と原則』(*Tables and Principles*)を評議員会に送って出版許可を求めたが、同月14日に評議員会は、出版不許可との結論を下した。

ギルクリストからの要望を受け、1803年5月2日には、モーアト (James Mouat) が、ヒンドゥスターニー語科の第1助手に任命されている。しかし、取締役会の反対、総督の交代、ギルクリストの辞職申し出により、その後、出版活動は、1803年頃までに行なわれたほど多くはなされなかった。1803年10月24日付の手紙の中で、当時の評議員会長官はギルクリストに対して、1802年2月1日付の申し出に対して認めた1,000ルピーまでしか支援は行なわないと述べている。

しかし、1803年11月5日にギルクリストは評議員会に対して、ヒンドゥスターニー語科の業務の増加に伴い、インド人学者を2人雇ってほしいとの内容の手紙を送った。<sup>22)</sup> 同月7日の会合で、評議員会は、この要求を却下したが、宗教本4作をペルシア語とヒンドゥスターニー語に翻訳するのを手伝ったあるインド人学者<sup>23)</sup>を雇うと決定した。

ギルクリストは、帰国後も著作活動を続けたが、それらの著作の中には帰国したことで未完となってしまったものも含まれ、帰国後も金銭的な損害を被ることとなった。こうした事態に対して、ギルクリストは抗議を行なっている。1807年2月7日付で代理人がベンガル政府長官に送った手紙への対応として、評議員会は、1804年にギルクリストが印刷した又は印刷予定であった著作に、5,000ルピーを支払うことを決定した。しかし、代理人は、14,000ルピー

---

22) 1801年11月のヒンドゥスターニー語科の学生は約60人、インド人学者は12人であった。同年12月15日には、ギルクリストは、評議員会に対して、インド人学者を8人増員するよう要求した。その後、ペルシア語作家が月100ルピーで雇われ、このペルシア語作家は、ペルシア語とヒンドゥスターニー語の両方を担当した。さらに1802年1月4日にギルクリストは、月50ルピーでナーガリー文字の教師を雇うよう要求している [Samrullah 1989: 47-48].

23) 彼は、ギルクリストの評議員会への手紙を受け、1803年11月5日に福音書をペルシア語やヒンドゥスターニー語に翻訳するために月80ルピーで雇われた [Siddiqi 1979: 161-162].



を要求していた [Vārṣṇeya 1947: 43-76].

ギルクリストがインドにいる間に完成させ、帰国後に出版に至った翻訳作品の一例としては、コーランのウルドゥー語訳が挙げられる。この著作の印刷は、ヒンドゥスターニー印刷所で行なわれた。評議員会は反対したが、総督は、1807年3月19日にこの翻訳本の発表を許可した [Siddiqi 1979: 155-157].

ギルクリスト以降、FWCにおける出版活動は衰退していった。これは、彼と同じように言語に対する知識と熱意をもった人物が現れなかったことが大きく関係している。ヒンドゥスターニー語の普及はギルクリストが在職していたFWC設立直後の約5年の間の著作によってなされたのであり、その後はそれらの著作の再版が繰り返され、新たな著作はほとんど生み出されなかった [Vārṣṇeya 1947: 151].

以上みてきたように、FWCにおける在職期間は短かったものの、ギルクリストはその生涯を通して、多くのインド諸語関連の著作活動に携わった。その活動がインド派遣書記教育やヒンドゥスターニー語研究に与えたインパクトは、大きなものであったと考えられる。

## 5. お わ り に

イギリス政府の軍医補としてインドへと渡ったギルクリストは、現地で業務に就き、ヒンドゥスターニー語を習得する必要性を感じたことがきっかけで、ヒンドゥスターニー語研究者へと転身した。困難に直面しながらも、彼は、ヒンドゥスターニー語の語学書や辞書を著した。こうした活動が認められる形で、ギルクリストはオリエンタル学校の教員に任じられた。

オリエンタル学校において彼が成果を挙げたことで、FWCが設立され、同組織における教育・研究活動が進められるに至った。彼は、FWCの主要開講科目であったヒンドゥスターニー語の教授を務め、同語科の責任者として教員を統率し、語科所属のインド人ムンシーの翻訳を監修して多くの刊行物を生み出した。FWCの設立、そして運営は、ギルクリストの協力はなしにはなしえなかったといっても過言ではない。

また、官吏へのインド諸語教育を推し進めた彼の活動は、インド官吏教育史にとっても、非常に重要な意味をもつものであった。19世紀半ばにオリエンタリストがアングリシストとの論争に敗れることとなったことについては冒頭で触れた。これまでの研究では明らかにされてこなかったことであるが、その大きな要因としては、ギルクリストが出版活動において十分な支援を得られなかったこと、また後任の教員が出版活動において望ましい業績を残せなかったことが考えられる。このことについては、今後研究が望まれる。

しかしながら、19世紀前後の時期に英領インドを巡る議論の中でオリエンタリスト的理想をインド文官教育組織の設立によって実現しようという大きな動きがみられ、ギルクリストがウェルズリー総督に協力することでそうした動きを後押しする役割を果たしたという事実は、

特筆に値する。オリエンタリストとアングリシストの論争や、ギルクリスト以外の FWC の教員、またそれ以降のインド文官教育については、今後の研究課題としたい。

## 謝 辞

本稿は、筆者の博士論文の一部に、加筆修正を加えたものである。本稿の執筆にあたりご協力賜った査読者及び全ての方々に、深く感謝の意を表したい。

## 引 用 文 献

### 日本語

- 浅田 實. 1998. 「東インド会社とヘイリーベリー校」木畑洋一編『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る』ミネルヴァ書房, 97-122.
- 倉橋 愛. 2017. 「大英帝国の外国語大学—Fort William College の創設から廃校まで」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文 (未公刊).
- 黄イエレム. 2016. 「インドにおけるプロテスタント宣教師の儒教經典英訳事業」『東洋学報』98(2): 61-89.
- 古賀勝郎・高橋 明編. 2006. 『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店.
- 浜渦哲雄. 2009. 『イギリス東インド会社—軍隊・官僚・総督』中央公論新社.
- 藤井 毅. 2003. 「近現代インドの言語社会史」小谷汪之編『現代南アジア⑤社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会, 63-98.
- \_\_\_\_\_. 2016. 『インド社会とカースト』世界史リブレット 86, 山川出版社.
- 山根 聡. 1990. 「Fort William College 刊行物リスト (1)」『外国語・外国文学研究』13: 125-139.

### 英語

- Begum, Obaida. 1983. *Fort William College ki adabi khidmat*. Calcutta: Taqsimkar Nuşrat Pablīsharz.
- Das, Sisir Kumar. 1978. *Sabibs and Munshis: An Account of the College of Fort William*. Calcutta: Orion Publications.
- Gilchrist, John Borthwick. 1798. *Oriental Linguist*. Calcutta: Ferris and Greenway.
- Jones, Richard Steadman. 2007. *Colonialism and Grammatical Representation: John Gilchrist and the Analysis of the 'Hindustani' Language in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Kesavan, B. S. 1997. *History of Printing and Publishing in India: A Story of Cultural Re-awakening Volume III: Origins of Printing and Publishing in the Hindi Heartland*. New Delhi: National Book Trust.
- Kidwai, Sadiq-ur-rahman. 1972. *Gilchrist and the 'Language of Hindoostan.'* New Delhi: Rachna Prakashan.
- Muhammad, Sayyid. 1977. *Arbāb-i naşr-i Urdū: ya'nī Forṭ Viliyam Kālīj ke Urdū naşr navīson kā taḥqīqī o tanqīdī tazkirah*. New Delhi: Etiqad Publishing House.
- Pritchett, Frances. 1991. *Selected Publications of the Fort William College*. Calcutta: First editions (1800-1817) recommended for preservation under S.A.M.P. auspices. (<http://www.columbia.edu/itc/mealac/pritchett/00urdu/baghobahar/BBFORTWWM.pdf>) (2018年3月7日)
- Ranking, G.S.A. 1911. *Bengal Past and Present* Vol. VII. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- \_\_\_\_\_. 1920. *Bengal Past and Present* Vol. XXI. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- \_\_\_\_\_. 1921. *Bengal Past and Present* Vol. XXII. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.

- \_\_\_\_\_. 1922. *Bengal Past and Present* Vol. XXIV. Calcutta: Journal of the Calcutta Historical Society.
- Roebuck, Thomas. 1819. *The Annals of the College of Fort William, From the Period of its Foundation, by His Excellency the Most Noble Richard Marquis Wellesley, K. P. on the 4th May. 1800 to the Present Time*. Calcutta: Hindoostanee Press.
- Samī'ullāh. 1989. *Fort William College: ek Mutāla'ah*. Delhi: Educational Publishing House.
- Siddiqi, M. Atiq. 1979. *Gilchrist Aur Auska Ahed*. Delhi: Anjuman Taraqqi Urdu (Hind).
- Vārṣṇeya, Lakshmiśāgar. 1947. *Fort William College: 1800–1854*. Allahabad: Allahabad University.
- \_\_\_\_\_. 1971. *Abhunik Hindi Sahitya Ki Bhumika*. Prayag: Manhar Press.
- Vedālaṅkāra, Sārada. 1969. *The Development of Hindi Prose Literature in the Early Nineteenth Century, 1800–1856 A.D.* Allahabad: Lokbharti Publications.

### 一次資料

- P.P. (筆者が本稿中で文書名を左記のように省略表記): East Indies, 1812–13, Papers relating to East India affairs: viz. Copy of a minute of the Governor General, relative to the College of Fort William, dated the 18<sup>th</sup> August 1800; --together with copies of the regulation for the establishment of that college, dated the 10<sup>th</sup> of July 1800; and of the statutes of the College of Fort William.
- IOR/H/487. 1781–1803. Educational establishments in India.
- IOR/H/488. 1798–1814. Educational establishments in India and England.

### 資料 1 ギルクリストが FWC で著作又は監修した刊行物一覧

#### I. 語学書

- (1) *A Grammar of the Hindoostanee Language* (1796)  
ギルクリスト著. 第 1 版はクロニクル印刷所, 第 2 版は 1809 年にカルカッタより出版. 第 1 巻第 3 部は, ヒンドウスターニー言語語学の体系について書かれている.
- (2) *A New Theory and Prospectus of Persian Verbs, with Their Hindoostanee Synonymes* (1801)  
ギルクリスト著. 英語とペルシア語で書かれている. トマス・ホリンベリー (Thomas Hollingberry) によって, カルカッタのハルカーラー (Hirkarrah) 印刷所より出版, 第 2 版は 1804 年にカルカッタで出版.
- (3) *Baghi Oordoo, or the Rose Garden of Hindoostan* (1802)  
ギルクリスト監修. ヒンドウスターニー語の文法書. 2 巻もので, ヒンドウスターニー印刷所より出版.
- (4) *Dialogues, English and Hindoostanee* (1802)  
ギルクリスト著の語学書. 第 1 版はカルカッタ, 第 2 版は 1809 年にエディンバラで出版.
- (5) *Hindee, Arabic Mirror* (1802)  
ギルクリスト著. ヒンドウスターニー語と関連のあるアラビア語単語に関する語学書. 1802 年にカルカッタで出版, 1804 年に再版.
- (6) *Hindee Exercises* (1801)  
ギルクリスト著. FWC の学生のヒンドウスターニー語の第 1 回・第 2 回試験用に, カルカッタで出版.
- (7) *Hindoostanee Philology: Comprising a Dictionary, English and Hindoostanee* (1786)  
ギルクリスト著. 第 1 版の第 1 巻は 1786 年にカルカッタ, 第 1 版の第 2 巻は 1790 年にカルカッタ, 第 2 版は 1 巻ものとして 1810 年にエディンバラ, 第 3 版は 1825 年にロンドン, 第 4 版は

1850年にロンドンで出版。

- (8) *Hindoostanee Principles* (1801)  
ギルクリスト著の文法書。
- (9) *Practical Outlines, or a Sketch of Hindoostanee Orthoepy* (1802)  
ギルクリスト著の語学書。カルカッタで出版。
- (10) *Persian Scholar's Shortest Road to the Hindoostanee Language, or Vice-Versa* (1803)  
ギルクリスト監修。ヒンドゥスターニー語科のインド人教員が著した。
- (11) *The Anti-Jargonist* (1803)  
ギルクリスト著のヒンドゥスターニー語入門書、語彙集付き。1800年、FWC設立前にカルカッタから出版していた『東洋言語学者』を改訂し8折版で出版。
- (12) *The Hindee Dictionary* (1802)  
ギルクリスト著。カルカッタで出版。
- (13) *The Hindee Directory, or Student's Introductor to the Hindoostanee Language* (1802)  
ギルクリスト著。文法解説を含む正音法と正書法の概論書。カルカッタで出版。
- (14) *The Hindee-Roman Orthoepigraphical Ultimatum* (1804)  
ギルクリスト著。東洋と西洋の言語の音声的区別を系統的に行なうために作られた語学書で、カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。『シャクンタラー』の内容が引用されている。第2版は1820年に出版。
- (15) *The Moral Preceptor, or Ukblaqi-Hindee* (1803)  
サンスクリット語作品『ヒトパーデューシャ』に基づいて著され、テレグラフ印刷所より出版。ギルクリストの監修下で、FWCヒンドゥスターニー語科のインド人ネイティブらが翻訳・構成。ペルシア語の学者がヒンドゥスターニー語を、またヒンドゥスターニー語を知っている者がペルシア語を学ぶ場合の入門的な文法書となっている。
- (16) *The Oriental Linguist* (1798)  
ギルクリスト著。語彙集、対話集、物語、詩等が含まれているヒンドゥスターニー語入門書。アラビア語、ペルシア語、サンスクリット語、ウルドゥー語、ブラジ・バーシャー、英語が使用されている。FWCのインド人学者の助けを借りて、ギルクリストが著した。第2版は1802(3?)年。
- (17) *The Stranger's East India Guide to the Hindoostanee* (1802(3?))  
ギルクリスト著。自身の文法書の改訂版。第1版はカルカッタ、第2版は1808年にロンドン、第3版(大幅に増補改訂)も1820年にロンドンで出版。
- (18) *Utaleeqi Hindee, or the Hindee Moral Preceptor* (1803)  
第1巻。ギルクリストの監修の下、ヒンドゥスターニー語科のインド人学者がペルシア語から英語に翻訳した寓話を収めた語学書。ヒンドゥスターニー印刷所より出版。ペルシア語の学者がヒンドゥスターニー語を、またヒンドゥスターニー語を知っている者がペルシア語を学ぶ場合の入門的な文法書となっている。

## II. 宗教・倫理・科学・政治

- (19) *Hidayut-ul-Islam, or a Collection of the Forms and Ceremonies of the Moohummudan Religion in Arabic and Hindoostanee* (1804)  
ギルクリスト著。アラビア語祈祷書の翻訳。ヒンドゥスターニー印刷所より第1巻が出版(第2巻は未印刷)。

Ⅲ. 物語文学

- (20) *Bagh o Bahar or the Garden and the Spring* (1802)  
第 1 版はギルクリストの監修下で FWC の学生用にインド人学者がペルシア語からヒンドゥスターニー語に訳したもので、120 ページから成る。1801 年 4 月までに完成していたとされる『4 人の托鉢僧』(*Char Darvesh*) が、同年 11 月 2 日に評議員会から印刷許可を受け、異なるタイトルで印刷された。第 2 版は 1813 年にローバックの監督下で翻訳された寓話集。共にカルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。
- (21) *Gooli Bukawulee, a Tale Translated from the Persian* (1804)  
ギルクリストが監修を務めた寓話集。カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所から出版。
- (22) *Nusri Bemuzeer* (1803)  
ギルクリスト監修。FWC のヒンドゥスターニー語科の学生のために、韻文から散文に翻訳された。カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。
- (23) *Prem Sagar, or the History of the Hindoo Deity Sree Kṛiṣṇa* (1810 年)  
ギルクリスト監修。『バガヴァタ・プラーナ』第 10 巻のブラジ・バーシャー版を FWC のインド人学者ラッラーラール (Lallūlāl) がカーリー・ボーリーに翻訳した物語文学。サンスクリット印刷所より出版。1803 年に一部発表され、1810 年に完全版が出版された。
- (24) *Rajneeti* (1802)  
ギルクリスト監修。サンスクリット語作品『ヒトパデーシャ』をラッラーラールがブラジ・バーシャーに翻訳した物語文学。カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。大判 4 折版。第 2 版は 1827 年。
- (25) *The Hindee Manual, or Casket of India* (1802)  
ギルクリスト監修。FWC の学生用に、FWC 内のヒンドゥスターニー語の教養ある詩人や、ミール・バハードゥル・アリーをはじめとするインド人学者らによって編纂された寓話集。ローマ字、ナーガリー文字、ペルシア文字で印刷。第 1 巻は 1802 年、第 2 巻は 1806 年に、カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。
- (26) *The Hindee Story Teller or Nuqliyati-Hindee* (1802)  
ギルクリスト著。第 1 版第 1 巻は 1802 年、第 1 版第 2 巻と第 2 版第 1 巻・第 2 巻は 1806 年に出版された。寓話集で、ローマ字、ペルシア文字、ナーガリー文字をヒンドゥスターニー語に適用する場合の解説書。これら 3 つの文字の比較が行なわれている。カルカッタのヒンドゥスターニー印刷所より出版。第 1 巻は英語、ペルシア語、ヒンドゥスターニー語で 108 話、第 2 巻はペルシア語、ヒンドゥスターニー語で 192 話を収録。
- (27) *The Oriental Fabulist* (1803)  
FWC 学生用に創作された、イソップ物語等の寓話の数カ国語対訳書 (英語、ヒンドゥスターニー語、ペルシア語、アラビア語、ブラジ・バーシャー、ベンガル語、サンスクリット語)。ギルクリスト監修の下、FWC のインド人学者が著した。
- (28) *Tota Kubanee* (1804)  
ギルクリストの監修下で、FWC の学生のためにペルシア語から翻訳された寓話集。ヒンドゥスターニー印刷所より出版。1801 年に一部発表され、1802 年にナーガリー版、1804 年にウルドゥー語版が出された。
- (29) *Lutaihi Hindee* (1810)  
逸話集。カルカッタで出版。ナーガリー文字とペルシア文字が使用されている。